

遠野物語（第九九話―幽霊の話）を読み直す

大月 和彦

遠野物語に、明治三陸大津波でひとりの男が幽霊と出会う話（第九九話）がある。

遠野の土淵村から三陸海岸の船越半島田の浜に婿入りした男、福二は、津波で妻と子どもを失う。生き残った二人の子どもと跡地に建てた小屋で暮らしていた。一年経った夏のある夜、用を足すため外に出ると、男女二人が近づいてくる。女は津波に呑み込まれた妻だった。

男は、福二が婿入りする前に妻と相思相愛の仲だったという。

「福二が妻の名を呼ぶと妻は振り返りにこと笑う。今はこの人と夫婦になりてありというに、子どもは可愛くないのかといえば、女は少しく顔の色を変えて泣きたり」。福二は、妻から男と夫婦になっていると告げられる。足早に去っていった。

以前この話を読んで「怨念の情や怖さは感じられない。むしろ、自然災害で先に死後の世界に来てしまったが、今はいい人と一緒になって幸せに暮らしていると、子育てをしている夫へ送ったメッセージと解したい。遠野の人たちは、悲しみの中にあっても明るさとおかしさを失っていない」と感想を記した。

「東北学」提唱者で東北各地をくまなく歩いた民俗学者赤坂憲雄は近著でこの物語の読み方が変わったという。

三・一一後の被災地で幽霊を見たという話が多かったという。大切な人を突然奪われるという事態の理不尽に向き合う人たち。逝ってしまった人たちと何とか折り合いをつけようと夢の中で死者と交信したり、幽霊と出遭うなどのドラマが繰り広げられていた。亡くなった人と生き残ってトラウマを抱える人と、折り合いをつけるプロセス―和解の通じて理不尽な事態の記憶が浄化されいく…。

福二は妻から、昔付き合った男と夫婦になっていると告げられる。この決別のことばを受け入れることは福二にとっては残酷な和解だった。生前から妻を疑い、自分を責め続けた自分の心ではなかったか。

この最悪のシナリオを受け入れて妻と和解を果たすことが、柳田国男のねらいだったのだ。